

立教学院史資料センター編

『The Spirit of Missions 立教関係
記事集成〈抄訳付〉第1巻(1859-1889)』

(立教学院 二〇〇九年)

大江真道

筆者は二〇〇〇年三月に、『立教学院百二十五年史資料編』第五巻が発行されて業務を終了されたとき、その偉業に対し、日本聖公会歴史研究会の一員として、その成果に深甚な敬意を覚え、かつ担当者のご労苦を想起しました。そして立教学院百二十五年史編纂委員会の今後に注目しておりました。日本聖公会のある教区では、記念史などの編集と出版が終り、スタッフが解散した際、使用した史資料の保管に配慮しないというケースがままありました。何年かたって後続の企画に任命された者が仕事に着手しようとするとき、非常に困った経験を何度も聞き、筆者自身もそのことを経験しました。

歴史の編集には時間を越えた継続性が必要です。立教学院では、百二十五年史編集集中に、次の百五十年史編集に向かつて「立教大学立教学院史資料センター」の開設を企画し、任務完了直後から研究の仕事を始動して、史

資料のさらなる収集をすすめ、『立教学院史研究』の発行など、今日まで多大な成果をあげ研究活動を推進してこられました。日本聖公会だけでなく、キリスト教および諸宗教の歴史関係者はこれに見習うべきであると思います。

今回、『The Spirit of Missions 立教関係記事集成〈抄訳付〉第1巻(1859-1889)』の刊行本を落手したとき、筆者は驚きを禁じえませんでした。『スピリット・オブ・ミッションズ』は、日本聖公会史研究にとっても必須の第一級資料です。原書とそのマイクロフィルムが新座の立教図書館に保管されていることは知っていましたが、それを本として手元で手にとって読むことができるなどということ画期的なことです。二〇〇九年は日本聖公会・プロテスタントにとって宣教百五十年という記念すべき年でした。本書の刊行が「立教学院創立一三五周年・日本聖公会宣教一五〇周年記念出版」であることはさらに意義深いことでもあります。

『スピリット・オブ・ミッションズ』は米国聖公会内外伝道協会が発行した機関誌です。今回刊行された第1巻は一八五九年から一八八九年までの三〇年間です。今後の企画は、「解題」によれば、一九五九年までが網羅されるとのことですので、大いに期待しております。今回刊行された第1巻は、立教学院の創始者であり、日本

聖公会の創立者でもあるチャニング・ムーア・ウイリアムズ主教の長崎上陸から、彼が日本での大きな歩みを残して日本聖公会の現任主教を辞職した年までの三〇年間です。この期間は立教の基礎が固められたときでした。日本の歴史の上では明治維新の前から帝国憲法が制定されたときまで、まさに日本が「翔ぶがごとく」近代化にむかって激変した時代です。この時代に我が国の教育を担ってきた立教が基礎をかためるまでにどのような歴史的経過をたどったのか、この『The Spirit of Missions 立教関係記事集成（抄訳付）第1巻（1859-1889）』には、立教創立期の苦難に満ちた詳細な記録が大量に内包されています。

本書の特徴は、まず、『スピリット・オブ・ミッションズ』の膨大な記事から、立教学院百五十年史に必要な記事がくまなく選定され、そして、その部分を翻訳した箇所を網掛け印刷がなされ、当該記事全体における翻訳以外の場所は通常の色合いで印刷され、さらに、当該記事以外の前後の部分も読もうとすれば判読可能なように薄く印刷されていることです。該当記事を英語でも読むことができ、また日本語で読めるという、他に類例のない斬新な編集と印刷技術には驚きました。どのような記事が選定されているかは「英文表題」（二七—三七頁）、「抄訳目次」（三八—四七頁）、「英和記事表題」（五七—三

五九二頁）によって一目瞭然になっています。

本書の内容は、目次によると、「口絵、まえがき、凡例、用語表記、改題、英文表題、抄訳目次、記事集成（抄訳）、英和記事表題、人名索引」という構成になっており、五九七頁の大冊です。口絵としては次の八点が挙げられています。1、一八五九（安政〇）年の『スピリット・オブ・ミッションズ』原書の「表紙」。2、一八六〇（万延元）年の「長崎の宣教師住宅」。3、一八八三（明治一六）年の「大阪聖テモテ教会」（現・川口キリスト教会の前身）。4、一八八四（明治一七）年の築地三七番の「立教大学校と三二神学校」。5、一八八四（明治一七）年の「数名の日本人学生」。6、一八八五（明治一八）年の「東京のミッション家屋の一部」。7、一八八八（明治二一）年の「東京の伝道師と神学生」。8、一八八九年一月号のニューヨークのチャーチ・ミッションズ・ハウスの図案。これらセピア調の美しい写真版の下には、それぞれ解説が付せられています。

本書「解題」（二七—二六頁）では、『スピリット・オブ・ミッションズ』が米国聖公会内外伝道協会の伝道機関誌であることの特徴と「前史」、外国伝道主事の歴代担当者、米国聖公会の伝道事業の特色、特にハイ・チャーチ派が内国伝道、ロー・チャーチ派が外国伝道に重点をおいたという、米国聖公会の伝道局の内実などを知るこ

とができます。また、米国聖公会信徒はそのまま伝道協会員であるという理念など、本書を読む上での必要不可欠な情報が、「解題」には豊富にしかも簡潔にまとめられています。本書が、『スピリット・オブ・ミッションズ』を「往時に購読した同派信徒の視座を共有できる」という指摘は正鵠を得ています。全米各地の米国聖公会信徒たちが、『スピリット・オブ・ミッションズ』から海外伝道地の情報や派遣された宣教師たちの活動を知り、礼拝で祈り、献金をして支えたことがわかることに、筆者は一世紀半をさかのぼったような臨場感さえ覚ええました。本書スカラシップ（奨学金）のリストの抄訳（二二三―二三四頁、二八二頁、三二〇頁、四〇六―四〇七頁、五〇五頁、五二二―五二三頁、五四八―五四九頁）は、このことを裏づける記事として重要な位置づけになっています。幕末長崎での開拓宣教師の動向や、大阪の英和学舎に関する書簡や報告も、立教初期の歴史にとっては重要な歩みであることが、本書によってあらためて想起されました。本書が今後、立教学院にとどまらず、日本聖公会の歴史研究にとっても、きわめて有用で重要な価値ある文献であることを、ここに報告したいと思いません。

立教大学経済学部編纂委員会編

『立教大学経済学部百年史』

（立教大学経済学部 二〇〇八年）

鈴木勇一郎

立教大学経済学部は、創立一〇〇周年記念事業の一環として『立教大学経済学部百年史』を企画した。これは、同学部の創立を専門学校としての私立立教学院立教大学商科が設立された一九〇七年と捉えたものである。

大学の年史類は数多いが、大学や学校全体ではなく学部個別となると、五〇年史や一〇〇年史を謳っていても、その実態は「座談会」や「思い出集」であることが少なくない。史料に基づいた通史を叙述するということには、能力と労力と時間が必要であり、それらを支える力に乏しい学部など、小さな組織では手に余ることが多いからである。

本書を編纂した立教大学経済学部も決して大きな組織とはいえず、年史の編纂に割ける予算、人員、時間は非常に限られたものであったことは想像に難くない。こうした困難にもかかわらず、通史の叙述をめざしたのは、立教大学経済学部が今後の同学部を考えていく上で、歴